

COTO TSLUSHIN

発行 / 滋賀医科大学同窓会湖医会
〒520-2192 大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内
TEL 077-548-2074, FAX 077-548-2094
E-mail:koikai@mx.biwa.ne.jp
http://www.biwa.ne.jp/koikai

湖都通信 33号

Since 1987, Editor Takehiro Inui,
Co-editor Takashi Kadowaki,
Tetsunobu Yamane

印刷 / 昌栄印刷

2000.6.15



藤宮龍也氏(1期生)、 山口大学医学部教授に!

本学1期生の藤宮龍也氏
(前京都府立医科大学法医学
助教授)は、4月1日付けで
山口大学医学部生体侵襲医
学講座の教授に就任されま
した。(2頁に関連記事)

樹々の緑が目には鮮やかな季節、いろいろな夢と希望を携えて、医学科95名(男子52名、女子43名)看護学科60名(男子1名、女子59名)の新入生たちと看護学科編入生10名が医大の門をくぐりました。6回生の先輩達は、昨年より始まった学外臨床実習の真つ最中。実習先では「湖医会」の先生方に大いにお世話になっていることでしょうか。後輩達の研修ぶりはいかがでしたでしょうか。(関連記事次号掲載予定)

「湖医会」にも医学科20期生(91名)看護学科3期生(65名)の新会員を迎えました。

また一昨年度より試行されていた基礎医学課程での「少人数能動学習」は、今年度予防医学の西山教授を委員長に実施委員会を設け行われることになりましたが、その様子を書いていただきました。

「湖医会」のホームページが誕生して1年。もうご覧いただけましたか?ご意見をどしどしお送りください。

ホームページ開設から1年

少人数能動学習(2000年度)について



滋賀医科大学
基礎医学教授懇談会
少人数能動学習実施委員会 委員長

西山勝夫

(予防医学講座教授)

6年ほど前から基礎医学教授懇談会で症例を中心にした少人数教育の検討が重ねられ、1999年度第3学年の2、3月における小規模試行を経て1999年度第3学年には1年間に拡張実施された。学生の潜在能力に改めてびつくりしたとの意見も教員からあつたが、学生の感想としては肯定的・否定的がほぼ半ばしていた。否定的な点については、方法を改良、工夫することによって解決されるものがほとんどということで2000年度は少人数能動学習実施委員会を設け行うことになった。本年度の少人数能動学習の経験は、本年度入学生が第3学年に進級した際に本格実施となるチュートリアルシステムに生かされるということで、それまでの間コンピュータの代わりにアドバイザーが教育に関わる方式がとられる。アドバイザーは課題の内容については直接教えず、討論の誘導、学習方法に対するアドバイスに徹し、学生が小グループで自主的に学習する。本年度の特徴は、

- ・ 学生向けの少人数能動学習履修要項、アドバイザーの手引き、参考文献の検索方法が事前に配布されオリエンテーションが実施される。
- ・ 学生は2001年の2月初旬まで同一時期に同一症例を4週間程度かけ一斉に学習し計7症例を終える。
- ・ 1症例学習中の各グループのアドバイザーは1人固定制とし、アドバイザーは基礎医学課程の全教員が担う。大学院生や分子神経科学センター、実験実習機器センター、動物実験施設の教員にも協力を願う。
- ・ 学生は各症例ごとにランダムにグループ編成がなされチームワークによる問題解決能力を修得する。

などである。1グループあたり9人の場合が避けられないことや施設・設備の不備などの問題もあるがアドバイザー、学生の方々の評価では出だしはまずまず順調のようであり、成果が期待されている。

主な記事

少人数能動学習について.....	1
教授就任にあたり.....	2
開業医.....	3
在任中の思い出.....	4

メーリングリストQ&A.....	5
そして僕はエキスパートになった.....	6
9期生同期会.....	7
LITTLE WINDOW.....	8

教授就任にあたり

近況のご報告

富山医科大学
病理学第一講座

教授 笹原正清

(1期生)



この度近況をご報告すべく筆をとる次第となりました。

湖醫会の皆様にかかれましては、ご活躍の事とお慶び申し上げます。速いもので、富山に転任致しましてから9ヶ月が過ぎ去ろうとしています。5月の今、富山は一気に新緑が萌え出て大変美しい季節です。富山医科大学は40分も車で走ると国立公園があり、また、ミスバショウの群生地があったりと本当に自然豊かな土地にあります。100年の伝統をもつ富山大学薬学部と一体となり滋賀医科大学開学の一年後に設立されました。和漢薬研究所、遺伝子研究施設があ

り、昨年度の文部省科学研究費は全国医科大学の中で2位を占め、活発な研究、教育、診療活動が行われております。免疫学、行動認知学、漢方などの研究もさかんです。滋賀医科大学からおいでになつています内科学の小林正先生も副学長に就任され医薬大での中心的な役割を

夢をいつまでも

山口大学医学部生体侵襲医学講座（法医学）

教授 藤宮龍也（1期生）

この度、山口大学医学部法医学講座を担当する事となりました。はや、卒後20年に近づいてきました。ここまでの道のりは平坦ではなく、若鮎祭・自治会・同窓会・大学院生等、1期生として特別な経験をしたいと思います。専門領域はアルコールの薬物動態学で、アルコール・アセトアルデヒド・酢酸の体内での動態を研究しています。この研究は京大時代に始めましたが、夢を大きく持ち、正攻法で攻めることの大切さを知りました。大学院生の時、新しい動態モデルを提唱したのですが、「Pharmacol. Exp. Ther」に載りました。当時から底状態でしたので半信半疑でしたが、まさに、道は開け

になられてご活躍くださっています。

さて、病理学教室は滋賀と同じ人員構成です。ただ、附属病院の病理診断の一部を担当している事はちよつと違うところです。複数の関連病院もあり、滋賀の病院を含めて診断の依頼が毎日あります。診断の為の免疫組織化学染色等をおこなうシステムが充実しております。全員で、外科病理診断学の勉強をしています。また、新しい研究に向けての努力も続けています。神経の発達や再生機構解明、あるいは変性疾患の予防に向けての研究を、特に増殖因子をキーワードとして行っています。腎臓の研究や、遺伝子転写調節因子の研究も行っています。これまでに、形態学、細胞培養、遺伝子クロニングあるいは発現解

析などの手法を用いておりますが、遺伝子導入発現、遺伝子改変、電気生理なども取り入れてみたいと思っております。ようやく走り出した教室で仲間作りを大切にしながら今後の夢を色々見えています。方法論にとらわれる事なく、目的にむかつて突っ走れる自由な研究、十分な討論のもとに高度の診断ができる教室作りをめざしています。

外科病理診断、研究、何でも結構です、私どもに興味を少しでも持っていただけの方がおられましたらどうぞ気軽にご連絡下さい。最後に湖醫会の皆様のますますのご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございました。



思います。機会があれば気軽に声をかけてください。

山口大学は新しい時代における大学の生き残りに向かって全力を傾けています。今は短期間に全国の大学間に大きな格差が生じる可能性のある時であり、まさに戦国・維新の時代のようです。同窓会も大学の発展に寄与することが期待されています。滋賀医大も誇れる母校であり続けて欲しいと念じています。そのためには大学が外部に対して一丸となる力の結集が必要ですが、後輩諸君に期待することは、自分らしく、自分の可能性を発揮することです。どうぞ、夢をあきらめず、夢を育て続けてください。世の中、小鬼はいますが、大鬼はあらず、道は開けます。

“先生、元気になったし、また来ましたあ〜”

ふじもと整形外科 院長 藤本昌樹 (6期生)



医院受付にて

京都市と高槻市の間にあるベッドタウン、向日市に整形外科医院として開業して4年が経ちました。漫才ネタのような、こんな患者さんの話を聞きながら朝の診察が始まります。無床の医院として整形外科を標榜すると、高齢者の患者が多く、あちこちの痛みの訴えに対処することが主な仕事になります。一般病院の整形外科では、外傷を中心に手術症例を扱うことが多く、慢性疾患多くは加齢が原因で、手術には至らない軽傷まで手が回らない(できれば診たくない)のが勤務医の本音でしょう。その一般病院にあふれた患者グループの愚痴を聞くのが「整形外科医院」の役割と言えるかもしれません。それで、こんな会話が生まれるわけです。とはいえ、悪性疾患が潜んでいることは結構多く、診察の手を抜かないように気をつけているつもりです。

手術は緊張感があり、嫌いではなかったのですが、大学入学当初から開業志向で、滋賀医大整形外科に入局後も気持ちは変わりませんでした。整形外科認定医の資格を取り、ある程度独立し立ちができる自信がついたため、開業候補地を探しましたが、これが結構大変でした。最初は大学の近くでと考え、大津、草津を中心に琵琶湖周辺を当たったものの結局縁がなく、出身地の京都(・)で話がありその場所にピンとくるものがあつたので、地元(の京都)に打診したところ、近くに外科医院があるからだめだと断られ、何となく行き詰まって向日市の小さな不動産屋をのぞいてみたところ、「近く新築される物件があります、広すぎますかねえ」と言っ話。見ると、約80坪の広さ。家主が変な業種は嫌だと言って、表には出していないが、それぐらいの印象で、検討させてもらいたいと返事をし、先輩と一緒に見てもらったり、医師会の許可を取り付けたりして、これをきくと縁と云うのでしよう、すべてのタイミングがうまく合って、トントンの拍子に話が決まりました。

僕としては、この時点では60点位の開業条件だと思っていたのですが、医療事務のできる高校の同級生が医院から徒歩5分のところに住んでいて、大阪医大をやめてうちに来てくれたり、リハビリのスタッフにまたまた高校の同級生の奥さんたちが参加してくれたら、気心の知れた人に囲まれて医院をスタート出来たことは、かなりの幸運だったと思います。もちろん患者にも、その類の馴染みのある人が結構いました。しかし何と云っても、僕の親父が、向日市役所に定年前の数年間を職していたことが、一番のプラス要因でした。開院してしばらくは、暇にし



夏の納涼会、正面が私で隣が事務長役の父親

こんな具合で、結果的に出身地近くで開業することになり、ラッキーも重なって、順調にこの4年間は来たように思います。現在医院のスタッフは、常勤4名、パート11名です。他の科に較べるとかなり多いのではないかと思います。賑やかで良いのですが、それはそれで苦労があるものです。その辺のことは、また機会があればお伝えしたいと思います。

こちらの方で勤務されたり、開業を考慮ておられる先生がおられましたら、いつでもご連絡ください。少しはお役に立てるかもしれません。

湖医会のみなさんへ

在任中の思い出

滋賀医科大学とともに四半世紀



前小児科学講座教授

島田 司巳

私は、昭和50年4月1日に助教の辞令をいただいて以来、本年3月末で25年間滋賀医科大学に奉職させていただきました。この間、第1期生以降の全卒業生に対し、小児科の卒前教育に携わらせていただいたことが、公的な面では、私の人生最大の喜びと誇りです。

四半世紀の思い出は、わずかな紙面ではとつて語り尽くせるものではありませんが、特に脳裏に深く刻まれている開学から第1期生卒業の頃までのことにつき、一言ふれてみたいと思います。

私もが赴任した開学当時には、現在の瀬田キャンパスは敷地造成中であり、臨床系の先発3講座（1内、1外小児科）は大津赤十字病院に医局を与えられての仮住まいでした。翌昭和51年8月、基礎研究棟及び臨床研究棟の一部が落成するとともに、現キャンパス

に移転し、病棟、外来の設計や、診療、研究、教育等の機器選定の傍ら、付属病院の開院を待ちました。この時期、付属病院を未だ目にするのできない1、2期生達に、少しでも医療の雰囲気に触れていただくため、国立療養所福井病院の重心病棟で、1泊2日の体験学習を実施したことが懐かしく想起されます。

ところで、私事になりますが、私は5月の連休に、ようやく教授室の引越しを完了しました。引越しに際し、それまで保管していました第1期生からの、膨大な本誌、再試、再々試等の成績表やレポート類を、思い出に浸りながらシュレッダーで処分しました。

再々試の答案には愛着のある氏名が多く見られましたが、その方々が現在いずれも大活躍しておられることを思い浮かべ、もし生まれ変わって、再度滋賀医大の教授になるようなことがあったら、全員1回でパスさせよう等と考えながらのシュレッダーでした。教師根性が骨の髄まで染み付いていると苦笑しながら。さすがに、現在母校で活躍しておられる1期生の方々の臨床実習レポートだけは、思い出が多すぎて処分し難く、20年目の返却をさせていただきました。

さて、私は、退官後、身体障害者更正施設・滋賀県立むれやま荘所長及び、びわこ学園理事として勤務していますが、障害児・者の医療と福祉に些かでも寄与できれば幸いと考えています。今後とも、湖医会会員の先生方には、一層のご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

地域、野外への思い入れ



前人文地理学教授

井戸 庄三

はじめとして六十数名の地理学者に非常勤講師としてご援助いただき、教育内容も充実していたと自負している。

地理学は「野外」の科学である。恩師の故藤岡謙二郎先生の持論を受け、年に2、3回、主として滋賀県内の歴史遺跡や文化施設などを訪ねる野外巡検を実施してきた。昭和51年から24年もの間、高橋誠一関西大学教授・前滋賀大学教授に現地説明の労をとっていただいたが、田舎道を歩きながら、あるいは弁当をつつきながら学生諸君と親しく語り合うことができ、野外巡検はそれなりの成果があったと思っている。

昭和62年、第12期生が中心になって歴史地理研究会が結成された。私が顧問のクラブで、第1回は飛騨高山へ1泊2日、その後毎夏、鞆・尾道、高知、松江、金沢、大洲・内子、津和野・萩などの各地へ2泊3日の旅をし、井戸ファン？の学生諸君と寝食を共にしたことがなつかしく思い出される。

昭和50年4月、11年金沢4年、徳島7年（ぶりに彦根の生家に戻り、守山、そして瀬田に通勤して四半世紀が過ぎた。いわゆる新設医大で、人文地理学に専任の教授が配置されているのは滋賀医大だけで、このことが私の誇りであり、それだけにいつも責任の重さを感じてきた。私に期待されている役割は何か。

自分が住んでいる土地に興味を抱き、いろいろ勉強し、その土地を正しく理解し、そしてその土地を誇りにする。そういった医学生を育てたい。これが私の願いです。（京都新聞、平成6年7月22日、滋賀広域版）

地域医療、地域看護といわれるが、「地域」を知らずして、その目的を全うできるはずがない。そこで人文地理学、地域科学、歴史地理学、地域文化論など地域に関する授業科目を多数開講してきた。

故足利健亮京都大学大学院教授を

湖医会カード

5月1日、琵琶湖ホテルと新契約！

ロイヤルオークホテルの食事が10%OFFに・・・ 8ページをごらんください

Q1

メーリングリストに参加したいのですが？

A；現在ふたつのメーリングリストがあります

ひとつは、会長・副会長など役員用

もう一つは、関東支部会用（関東周辺の卒業生の集まり）

です。役員用は事務局が管理し、関東支部会用は責任者の方が管理されています。

参加申し込みなどの連絡は、事務局まで電子メールでお願いします。

Q2 メーリングリストは、申し込みば開設してもらえると聞きましたか？

A；個人では無理ですが、グループでなら下記の条件をクリアすれば申し込みます。

(1) つぎの4項目を事務局に知らせる

1. どのようなグループで

2. どのような目的で

3. 期間は

4. 責任者の姓名・期生

(2) メンバーは卒業生に限る（卒業生以外を申し込んだら閉じることになる）

(3) 湖医会もメンバーに加えること

メーリングリストQ&A

Q3 メーリングリストの費用は？

A；無料で使用できるものもありますが、湖医会ではセキュリティーやコマーシャルメール等の問題を考え有料のメーリングリストを使っています。申請が受理され、開設したメーリングリストの費用は湖医会が負担します。このため、申し込みのあったすべてのメーリングリストがすぐに開設できるわけではありません。

Q4 卒業生をひとつに結び、臨床や研究の話をしたり、交流ができるリストがあれば良いと思いますが・・・

A；今は試行中ですので、現時点では考えていません。今後メーリングリストの希望者が増えてくると、使用方法や、規定なども考えていくつもりです。新たなことが決まりましたら、ホームページや湖都通信でお知らせいたします。

(担当幹事)



地域別勤務先状況（同窓会調べ / 6月15日現在）

	正会員数		大学病院		国公立病院		民間病院		開業		その他（保健所・企業等）	
	医学科	看護学科	医学科	看護学科	医学科	看護学科	医学科	看護学科	医学科	看護学科	医学科	看護学科
北海道	8	0	0	0	2	0	4	0	2	0	0	0
東北	7	1	1	0	1	1	3	0	2	0	0	0
関東	159	18	39	3	27	4	70	11	22	0	1	0
信越	15	2	4	1	6	1	6	0	3	0	0	0
北陸	36	5	10	1	2	4	17	0	3	0	0	0
東海	105	19	22	10	28	6	43	3	11	0	1	0
滋賀県	765	86	387	50	130	22	184	14	63	0	1	0
京都府	309	25	101	16	19	9	163	0	26	0	0	0
大阪府	229	17	66	10	40	7	101	0	20	0	2	0
兵庫県	73	10	15	3	26	6	24	1	8	0	0	0
奈良県	27	2	3	0	6	1	14	1	4	0	0	0
和歌山県	10	0	1	0	3	1	5	0	1	0	0	0
中国	34	2	15	0	6	0	11	1	2	0	0	0
四国	16	1	7	1	1	0	6	0	2	0	0	0
九州	24	1	3	1	2	0	13	0	6	0	0	0
沖縄	6	0	4	0	1	0	0	0	1	0	0	0
合計	1823	189	678	96	300	62	664	31	176	0	5	0

卒業した大学の医学部附属病院で卒後臨床研修を行った者の比率（新設医大のみ掲載）

卒業年度	平成8年度卒	平成9年度卒	平成10年度卒	平成11年度卒
旭川医科大学	45.5	43.8	32.0	38.0
山梨医科大学	32.0	35.0	39.0	29.0
富山医科薬科大学	50.0	38.0	43.0	48.3
福井医科大学	42.0	38.0	47.0	36.0
浜松医科大学	66.6	69.3	55.0	45.0
滋賀医科大学	54.0	58.0	64.0	46.0
島根医科大学	25.3	24.5	26.0	40.0
香川医科大学	25.7	29.9	17.6	25.8
高知医科大学	22.0	34.0	36.0	30.0
佐賀医科大学	47.1	34.0	60.0	40.9
大分医科大学	47.0	47.0	41.2	41.8
宮崎医科大学	54.7	53.8	45.0	30.0

『医学教育カリキュラムの現状』全国学部長病院長会議 抜粋

そして僕はエキスパートになった

労働省産業医学総合研究所 有害性評価研究部

毛利一平 (8期生)



右から2人目が筆者

【エキスパート(専門家)って・・・!?】

その日、カウンターパート(注)から投げられた言葉に、僕は一瞬たじろいだ。はたから見れば、きっと顔を真っ赤にして、額には汗をにじませていたに違いない。

「私はあなたに何も期待していません。2年間タイでの生活を楽しんでもらえれば、私たちもそれで幸せです。きっと2年経てば、あなたも立派なエキスパートになるでしょう。」

返す言葉がなかった。相手は僕を「専門家」とは認めていない。苦笑しながら、なんとかその場をやり過ごそうと必死でなにかしゃべったには違いないが、その内容を覚えてはいない。

1997年9月、JICAの長期専門家としてタイの労働安全衛生プロジェクトに参加しないかと誘われた。国際保健医療協力の場で働くことは、高校時代からの夢であったが、労働衛生という国際協力には一見遠い世界に身を置くようになってからは、かなわぬことと半ばあきらめていた。だがついにチャンスがやって来た。周囲の人間に相談してからと答えながら、心の中では既に結論が出ていた。「このチャンスを逃すことはできない。どんなことがあっても行く。絶対に行く！」

【タイ国立労働安全衛生センター機能強化プロジェクト】

1980年代から90年代にかけて、タイの経済は目覚ましい成長を遂げた。だが、どのような国においても見られることであるが、華々しい経済成長の影で、多くの労働者が労働を起因とするけがや病気に苛まれていた。例えば1991年から1995年までの5年間、タイの労働災害の発生率は1000人当たり40件を超えていたが、これは(単純に比較できないものの)同時期の日本の数字の10倍である(1000人あたり4件前後)。

近年、労働安全衛生の問題は単なる内政問題では終わらない。一方で労働者の健康に問題を残しながら、他方で輸出に精を出しても、それはソーシャルダンピングとして国際社会からは非難を浴びる。労働安全衛生指標の改善を国家目標としたタイ政府からの要請を受けて、1996年6月、プロジェクトは始まった。

【夢から醒めて】

1998年3月、念願の夢がかない、国際協力の専門家としてタイの地を踏むことができたうれしさも、そんなに長くは続かなかった。カウンターパートの考える「エキスパート」と、僕の肩書きである「専門家」には、かなりの開きがあることは明らかだった。ただ、辛辣な言葉に圧倒されながらも、不思議と怒りは感じなかった。そう、問題は明らかに僕にあった。

初めは「純粹」に「途上国の悲惨な状況を救いたい」という気持ちから国際協力を目指したが、そのうち日本にも多くの問題が存在するを知り、また一方で途上国の方が優れている場合も少なくないことを知り、深い混乱に陥った。いつのまにか、「国際協力」という言葉へのあこがれだけが残り、その意味が分からなくなっていたにもかかわらず、夢にしがみついていた。僕の日常の活動の成果から「国際協力」が生まれたのではなく、「国際協力」そのものが僕の活動の目的となっていた。少なくとも僕の場合、それは間違いだった。冒頭のカウンターパートの言葉は、そんな僕の目を覚まさせる、こちよ一撃でもあった。

【Think Together, Do Together】

ただ考えている余裕はそれほどない。ぼやぼやしては、与えられた2年間などあつと言う間に終わってしまう。二つのことを心に誓った。「教える」のではなく「伝える」ことに徹する。一緒に考え、行動する。その中からタイの将来に役立つことを見つけていこう、と。

セミナーなどの場を通じて、自分が自信を持って伝えられるほんのわずかな知識を伝え、「御用聞き」と称してはカウンターパートたちの部屋を回った。やがて信頼してもらえるようになったの

か、少しずつではあるが現場への調査にも同行できるようになっていった。赴任後既に半年以上が過ぎていた。

【活動を終えて】

労働衛生分野での国際協力は、一般にイメージされる「国際保健医療協力」とは異なる。とりわけこのプロジェクトではデスクワークが主体であり、カウンターパートからの質問に答えるために資料を検索・作成して一日を終えることも多かった。現場、すなわち工場に出かけて調査を行うにしても、僕自身がタイの労働者に対して直接にか(医療行為など)をできるわけではなかった。

とても地味ではあったが、タイに於ける新しい労働衛生行政のシステム作りに参加できたということで、非常に充実した2年間だった。例えばプロジェクトの日本側メンバーからの働きかけもあって、タイ労働社会福祉省と保健省の労働衛生関連部局が相互の連携を深めたことなどは、忘れられない思い出となった。

タイから学ぶことも多かった。企業の労働安全衛生担当者の教育システムなどは、日本と比較しても決して見劣りしない立派なものであったし、中小企業における低コストでの労働環境の改善手法などは、いまや日本へ輸出されているほどである。働き方、地域社会での相互扶助、職場への女性の進出、生涯教育のサポートなどでは本当に見習うべきことが多かった。

2年間、無我夢中だった。いろいろと手がけたことは多いが、それがどれだけタイの人々に役に立ったかと問われると心もとない。それでも、砂浜に砂粒を一粒二粒加える程度のことではできたのではないかと自負している。そしてやはりカウンターパートの言葉通り、「エキスパート」になれたかなとも感じている。ただ、これで僕の国際協力が終わるわけではない。これからはもっと日本という国に生きている自分を意識しながら、地道に協力活動を続けていきたいと思っている。

9期生 卒業10周年記念 パーティに招かれて



滋賀医大名誉教授 横田敏勝

卒業後10年、それぞれが独り立ちして、立派に活躍していることを知り、嬉しいひとときを過ごすことができました。みんな学生時代の面影を留めていますが、すっかりお医者さんらしくなりました。

How use doth breed a habit in man !
人間は習慣によってなんとかわるものか！

How beauteous mankind is !

O brave new world ,

That has such people in't .

人間がこうも美しいとは！

ああ素晴らしい新世界だ、

こういう人たちがいるとは！

みんなを見てみると、こんなことを実感します。しかし、今が人生のピーク。身体機能は、次第に衰えて行く約束になっています。

この次にみなさんと会えるのは、20周年のときでしょうか？そのときは、女子学生のおこがれだった優等生がただの男におさまり、腕白だった劣等生が大成していたりするものです。それを楽しみにしています。ただし、運がよければ、の話です。

Let the end try the man .

人間の真価が定まるのは死を迎えてからだ。

優等生、劣等生の両方に声援を送ります。

時計は動いていた

小林知恵



「学生時代は止まった時間、今からこの時計とともに自分たちの時間が始まる」卒業記念時計除幕式における私の一世一代のスピーチから早や十余年、やはり時計は動いていた。

2000年2月19日、ロイヤルオークホテル

に集まった面々を見渡せば、時流に乗って意気揚々と進む人あり、逆流に必死で立ち向かっていく人もあり、ただ流れのままに生きる人もまたあり、だが、その表情は、それぞれ自信に満ちて一様に光り輝いていたのであった。しかし会もなかばに各自の入学時の写真が映写され、壇上に立った現在の姿と並べられたその瞬間！私たちは思い知らされたのであった、時間は自らが望まぬ方向へも流れていたことを。これからも時間は流れ続ける、年齢を重ねるとともに流れが加速していくという説もある、流れ始めた自分の時間はもう止まらない、今度止まるのは人生が終わる時かも知れず、皆さん身体に気を付けて、また会う日までお元気で～。



同期会に参加して

鹿野 勉



2000年2月19日、土曜日。外はあいにくの冷たい雨で、北部ではかなりの積雪のようだった。会場前にはすでに懐かしい顔が並んでおり、あちこちですでに話の輪ができていた。けれども、よく聞こえてくるのは、“みんな変わってないな”という声だった。なかには体重が2倍近くになったものや髪の毛がかなりさみしくなった人もいたが、ほとんど変わっていない者も多く、ついこの間、卒業式があったような錯覚に陥るような感じだった。それだけ、我々が若さを保っているのか、それとも10年前にすでにいいおっちゃん、“おばちゃん”だったのかもしれない。

写真撮影を終え、宴会が始まった。佐野元学長、土井田先生、横田先生のお話に加え、久しぶりに気楽な友達同士の会話が楽しいひとときだった。子供のこと、仕事のことなどを話していると、学生時代にそれほど実習が好きそうでなかった彼が、今は毎日顕微鏡を覗いていることが判明したり、アメリカ留学中にゴルフがうまくなったという羨ましい話もあった。

最後は、恒例の近況報告。病院での5分外来に嫌気がさし、開業してじっくり患者と話ができるようになったと打ち明ける人もいた。同じ病院に何人かの同期生のいる病院ではお互い協力しながら(患者を押し付けあいながら?)仕事をしているとのこと。皆、それぞれの場でそれぞれの道を歩んでいるようだった。

これまでの卒業10年間を振り返って、我々は、診療等で忙しく、家庭においても結婚や我が子の誕生などが重なり変化の多い時期だった。これからの10年はどうだろう。仕事、家庭で少しまわりを見回す余裕ができたときにどのような道を歩んで行くのだろうか。また、10年後にお会いしましょう。

最後に、今回の同期会の幹事を勤めてくれた平野君、薦田君、村田君および湖医会の関係者の方々にお礼申し上げます。



助教授紹介

(2000.6.15 現在)

安屋敷和秀 (3期生) 滋賀医大薬理学講座 助教授



1983年 6月 滋賀医大精神科神経科研修医
 1984年 2月 滋賀医大精神医学講座助手
 1985年 4月 医療法人社団瀬田川病院医員
 1987年 4月 滋賀医大大学院入学
 1989年 4月 滋賀医大薬理学講座助手
 1993年 10月 ドイツ・JWG-ゲータ大学留学
 1995年 5月 滋賀医大薬理学講座講師(学内)
 2000年 3月 滋賀医大薬理学講座助教授

1975年、脳動脈を拡張性に調節する非アドレナリン性非コリン性神経が当教室で発見されました。15年間この神経の伝達物質は不明でしたが、1990年に同伝達物質が内皮由来弛緩物質と同じ酸化窒素(NO)であることが証明されました。半減期5秒、分子量30の気体が、神経伝達物質であるとの発見は、世界中の研究者にとって驚くべきことであったと思います。現在は、NO以外の新しい内皮由来の血管拡張物質をめぐる多くの議論がなされています。私達はこの物質を世界に先駆けて発見・同定しようと、毎日努力しております。興味をお持ちの先生方が薬理学教室の門を叩いて下さることを心待ちにしております。

住所・勤務先肩書き等に変更がありましたら事務局にご一報ください

遺児育英基金のお礼

平成11年3月27日に他界した小西孝明先生の遺児育英基金について、湖都通信30号にあわせて募金をお願いさせていただきましたところ、これまでに144件の個人ならびに有志団体の方々からお申し入れをいただき、募金総額は2,210,680円に至っております。皆様方の暖かいご支援に深く感謝する次第でございます。

私たちは、残された子供達に、この世に父親はもういなくても、その父親の同級生、同窓生が暖かく見守っていてくれるのだと感じてもらい、たくましく育ってくださることを願ってこの基金を始めさせていただきました。その為にもこの基金を継続していきたいと考えておりますので、今後ともご協力のほどお願い申し上げます。本基金の運用の詳細につきましては、改めてご報告させていただきますが、まずは、本紙面をお借りいたしましたお礼を申し上げます。

7期生小西君遺児育英基金担当幹事

尾崎康弘、梶原信之、西村明儒
山本育男、吉住一生

老松夏美(医学科20期生)

国家試験に合格しましたので4月24日から大阪大学医学部小児科にて研修を開始しております。

外科の研修医は覚悟をしいたとはいえ大変な日々です。慣れない病院で右往左往しているので早く慣れて一人前になりたいです。

湖医会カード 食事割引き お得情報

ホテル/内容	食事割引	宿泊割引	婚礼割引
ロイヤルオークホテル	10%off	¥12000	有
大津プリンスホテル	—	¥13000	有
ホテルニューサイチ	10%off	¥7000	有
ホテルグランヴィア京都	—	10%off	有
琵琶湖ホテル	5%off	30%off	有
瀬田アーバンホテル	5%off	10%off	—

* 食事割引きは湖医会カードを提示してください

* 宿泊・婚礼割引きについては事務局に申し込んでください

- ・1泊朝食付き1名の料金
- ・それぞれの割引きについては休前日等により料金が変わります

<事務局>

tel : 077-548-2074

fax : 077-548-2094

e-mail : koikai@mx.biwa.ne.jp

湖医会ホームページのご案内

- ・湖医会からのお知らせや案内
- ・名誉教授からのメッセージ
- ・よく通った「あのお店」紹介 など

<http://www.biwa.ne.jp/koikai>

5月17日付けで
 しゃくなげ会理事
 長に、本学名誉教
 授の脇坂行一氏が
 就任されました。

訃報

本学元教授
 神館義朗氏が、
 4月5日逝去さ
 れました

ご協賛
ありがとうございます

株式会社近畿予防医学研究所 / 小野薬品工業株式会社 / 田辺製薬株式会社
 スミスライン・ピーチャム製薬株式会社 / 医療法人医誠会京都ルネス病院
 帝人株式会社 / 中外製薬株式会社 / フクダ電子京滋販売株式会社

(順不同)